

俺には好きな人がいる。けどもうきっと会えない。

「あー…だりい…」

高三になったばかりの春。同じクラスには大して面白い奴もいない。学校で絡むだけの奴ら。

「柳～、カラオケ行かね？」

「いや、俺バイト」

と、適当な嘘をつく。カラオケとか何が楽しいわけ？

「じゃ、先帰るわ」

振り返らずに手をひらひらさせながら教室を出る。後ろからなんか話しかけられていたけどすぐにイヤホンをして耳を塞ぐ。友達も部活もバイトも興味がない。勉強はできない、する気もない。だってする意味がないから。

イヤホンからは英単語が流れてくる。高三の俺には簡単すぎる英単語のはずなのに、俺は理解できていない。ただ音が流れてくる。

「さんで一、まんて一…」

聞こえたまま真似をして口にする。何度も言うが俺は勉強する気はない。誰も来ない二号館に入ると、道具置き場になっている階段に腰をかけた。

「んー……はあ…」

伸びをして、カバンを枕にする。イヤホンはしたまま、流れてくる音を真似する。

「らいぶらりー……ぼすとおふいす…」

「そこで何してんの？」

うっすらと声が聞こえた。その声に聞き覚えがあって、イヤホンを反射的に外しながら飛び起きる。

「…え、なんで……………」

「ふふ、おっきくなったね、柳」

目の前にいたのは、もう会えないと思っていた人。勉強する意味を失った原因。そう、俺の好きな人、多部リュウジくん。

「隣…座ってもいい？」

もちろんいいんだけど、幻覚？

「あはは、幻覚じゃないよ、いるよ」

「え？」

「声に出てた、変わらないなあ。もう」

わしゃわしゃっと頭を撫でられる。

「え、多部くんっ…」

「ん？」

「なんでここにいるの？」

卒業してから、付属の大学ではなく別の大学に行ってしまった。高校卒業まではいつでも会えるところにいたのに、別の大学に行ってしまった。別の世界に行ってしまったと、中三の頃の子どもでバカな俺は怒っていた。

「え？教育実習だよ」

「なにそれ」

「ねえ、先生の話はちゃんと聞こうよ」

HRなんて聞いているわけもないので、なんの話か全くわからない。頭上にはてなを浮かべていると説明してくれた。

「来週から柳のクラスの先生に付くんだ」

「もちろん授業もするよ？」

「……は？」

この一！と言いながら多部くんは俺の頬をつねった。

「またね？って言ったでしょ？」